

幼児の記憶についての実験的研究

大阪樟蔭女子大学児童研究所 大西 憲明

清水 俱子
豊成 啓子

目的 幼児は周囲の事物に積極的な関心と興味を示すが、これを一層ゆたかにするために観察の機会をあたえたり、祝聴覚教材を呈示している。しかし、問題は、保育者によって指示されたり与えられる事物を、いかに認知しているかの、かれらの心性的特徴を明らかにするとともに、その所与の事物、事態を、どのようなかたちで記憶学習するかの一般的傾向を検討しておらなければ単なる上からの指導に終る。次に、こういう面の基礎的知見を得るため、記憶的再生を問題にし、これを通して記憶態度を明らかにし、さらに観察指導の方法の手がかりを得ようとした。

方法 まず絵本を見せて、その呈示時間三〇秒の間に覚えて再生した事物を調べた第一実験では、再生個数は三十八個、平均五個であった。即ち短時間の観察による記憶範囲は狭く、しかも、かれらの生活にきわめて身近かに経験されるものであった。この場合は、幼児用の絵本という比較的具体的に彩色された人物や事物であったが、これらのどのような要因が幼児に強い記憶効果をもたらせるかを、検討することにした。そこで、具象性・現実性の低い刺激材料として、単なる輪廓線による事物画（下駄、洋傘などの日用品八個）を、全面的に赤、緑、黄などで塗りつぶした場合と、同様の図形ではあるが彩色しない場合について、三〇秒呈示して、その彩色

の有無による再生効果を、第二実験で調べた。結果は彩色された事物がより有意に再生されるとはいえなかった。結局色よりも事物の具象性・親近性に規定されていた。次に、第三実験では、以上の刺激図形よりも、さらに現実度の低いものとして、三角形、正方形、菱形、円形などの人個を、それぞれに色を変えて塗りつぶした場合と、単なる輪廓図形のもの系列について比較してみたが、こういう刺激では彩色されたものの再生が優れ、かつ円、三角形、正方形という単純な形態をなすものがよく再生された。次に、再生法自体を問題にし、再認法で調べた第四、五、六実験では、再生率は高くなつたが、この場合も、刺激が幼児に対してもつ有意味性の水準に支配されていた。また、刺激材料の配置についても第七実験で検討したが、左右相称、上下、水平という比較的安定された配置のものがよく再生された。

結語と考察 五才児について種々の条件下で、どういふ事物をよく観察し、記憶学習し、再生するかを検討したが、よく再生されるものは身近かに経験される具象性の事物であり、それだけ幼児に有意味的人格を具備したものであった。従つて、極端な表現が許されるなら、観察させる対象は、以上のような要因をもつものから出発するのが、かれらによく学習され、体制化されることにならう。

（大会発表論文抄録54—55頁）

幼児の観察教育について

（第3報—幼児と保育者の描いた鯉の絵を通じて
感じた容器の種々相の重要性）

山内 美子

（大会発表論文抄録42—43頁）